エッセイ 千字文

大河ドラマと日本社会

佐伯 順子

プロフィール
同志社大学大学院社会学研究科教授。専門はメディア学、比較文化。映像や文学にみられる男性と女性の表現、そこから社会的背景を読み解くことを研究テーマとして活躍。著書に『遊女の文化史――ハレの女たち』（中央公論社、1987年）、『「色」と「愛」の比較文化史』（岩波書店、1998年。サントリー学芸賞、山崎賞）『「女装と男装」の文化史』（講談社、2009年）などがある。

子供時代、ＮＨＫ大河ドラマは、歴史好きの私の毎週の楽しみであった。『天と地と』では、石坂浩二演じる上杉謙信のイケメン（という単語は当時は無かったが……）ぶりにトキメき、『樅ノ木は残った』の原田甲斐の重厚な存在感に感嘆し、『新・平家物語』の終幕、「みんな死んで、おれとお前か……」という緒形拳のしみじみとした台詞は、世の無常を幼な心に刻みつけたものであった。

しかし、近年の日本のテレビドラマは、韓流ドラマ人気におされてか、勢いが衰えているようだ。長らく韓国ドラマには無関心だったのだが、時代劇『イ・サン』にはまってその魅力に目覚めた。懸命に王に仕える重臣役のハン・サンジンが、私のお気に入り（難局にあたって悩む表情がステキ！）だが、役者の演技力と物語の起伏が、かつての日本の大河ドラマのレベルにあることが、韓流ドラマ人気の要因であろう。日本の昨今のテレビドラマは、実力よりも知名度に依存したキャスティングが目につき、脚本を消化しきれない役者たちの薄い演技（とさえ言えないもの）に白けてしまう。いや、そもそも脚本からして薄っぺらいのかもしれないが。

かたや、韓国ドラマガイドに掲載されている役者インタビューは、プライベートを披露する日本のインタビューと違い、役柄や物語の解釈、演技論が主体で、韓国の役者がいかに、役づくりに真摯に取り組んでいるかが伝わる。この種の掘り下げたインタビューに、現今の日本のタレント役者たちは果たして応じることができるだろうか。

今年の大河ドラマ『平清盛』の視聴率の苦戦が伝えられるが、同じ日曜の夜に視ると、『イ・サン』との差は歴然。とりわけ女性登場人物の無力さと辛気臭さに絶望する。歴史的に仕方ないとはいえ、うつむきがちで無表情で、男たちの欲望の道具でしかない女たちの姿は、停滞感漂うこのご時世、あまり見たいものではない。一方、時代がより新しいとはいえ、韓国時代劇の女たちの、王（＝男）をも圧倒する自己主張と主体性には、大いに勇気づけられる。

時代劇といえども、ドラマは同時代を映す鏡。韓国社会の勢いと、日本社会の閉塞感との落差が、ドラマにも自ずとにじみ出るのか。

過去五一作の大河ドラマの歴史のなかで、女性単独主人公は八作、夫婦ものは二作。来年は九作目の女性主人公。しかも我が同志社ゆかりの新島八重。日本の復活と女性の活力を象徴するドラマとなり得るのか――今後の日本社会の鏡として注目される。

月刊 みんぱく 7月号目次

1 エッセイ　千字文
大河ドラマと日本社会　佐伯 順子

2 **特集　世界をさわる手法を求めて**
ユニバーサル・ミュージアムの可能性
対談　小山 修三　広瀬 浩二郎

4 さわる展示のあり方を求めて
――吹田市立博物館のこころみ　五月女 賢司

5 「時間」の壁を超えられるか!?
――レプリカの可能性　鈴木 康二

7 エデュケーターの役割
――メトロポリタン美術館の事例から　大髙 幸

8 ベン・シャーンをさわる、見る、聴く
――平面作品への重層的なアプローチ　真下 弥生

10 研究フォーラム
みんぱく公開講演会
ヨーロッパと日本の宗教――問いなおされる救済のかたち
藤本 透子

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
国民国家の境界を書きかえる試み
フランス・国立移民史博物館（シテ）
田邊 佳美

16 連載リレー 知の収蔵庫
住をめぐる旅 その1
家作りは本能か?
佐藤 浩司

18 多文化をあきなう
貧困から抜け出す力――民主的な人と文化の育成
野田 沙良

20 異聞逸聞
ドングリだけでは育たないイベリコ豚
野林 厚志

21 みんぱく私の逸品
ナーガスワラム
寺田 吉孝

22 フィールドで考える
住居をよむ
――中国新疆ウイグル族の暮らしの場
熊谷 瑞恵

24 次号予告・編集後記